

本年の大会を前に

(稿欄) 原 宏

最近、大牟田良「ものいわけ農民」を讀んで深い感銘をうけた。あたかも著者に連れられて、岩手の村々を廻り、或時は農家の縁先で、或時は相端で農民からじかに話しかけられてゐるような錯覚さえ感じた。師らぬ親類であると共に切切と訴える著者の感情をそれ自体ですでに巧まざる芸術でさえある。三月二十四日、内山政原氏が朝日新聞に寄稿した「農民の発見」の中でいっているような農民の姿を窺ひあてた作品とは、まさにこんな著書ではないだろうか。そして村落研究を志すものにとつても好備のサイド・ブックたる役割を十分に果してくれらるゝと思う。

又折によれて村を歩き、村人の話に耳を傾けることも村落研究には欠くことのできないことだと思ふ。巻を遠ざかり鳴子の山嶽に會員が一夜を廻りぬかす旅は、それ自体一つのフィールド・ワークのようなものである。恐らく大学の教壇で聞く村落社会研究会とは異つたエッセンスが生れるのではなからうか。ただ宿泊費がいくら安くついても、東京までと大して遠くないという訳にはいかない。手許の池田を開いてみたが、矢張り九州から東北までは遠い、どうしても東京で乗り継がねばならない、これが極めて厄介である。

そこで、東京も世帯も振り廻して行くからには、ついでといつては眞正な旅だが(遠くまでも大会参加の調練物として)鳴子での会が終わつたら、幾つかの村——できることなら既に村落社会研究論文の資料となつてゐるような村——を歩いて、なるべく生活する農民の姿——論文のバックとなつてゐるような農民の姿——をカメラに収めて來たいと思つてゐる。

「ものいわけ農民」の北上の山嶽であるが、それとも陸羽泉嶽の頂に聳上の山嶽なのか、まだそこまでは尋ねてゐない。

もう一つの宿屋はこけしの作者を訪れてみたい——鳴子の奇蹟屋、同じく武男、作位の平賀謙次郎、水地山の徳丸、遠刈田の好秋……——といった人達をたずねてみたい。そして私の足跡を辿つてゐるこけしの仲間の子をふやしてやりたい。しかし、あれもこれも時間と金次第のことではあるが。